
ココドコ！～まいごのまいごの勇者様～

佐藤筍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コロドコロ〜まいごのまいごの勇者様〜

【Nコード】

N4864S

【作者名】

佐藤筍

【あらすじ】

魔王討伐のため、旅に出ることを決意したアレックス。生まれ育った故郷を出る日、支度を済ませ部屋を出ようとしたのだが…。家から出れば異郷の地、森に入れば天守閣の摩天楼、海を泳げばお空に浮かぶ雲の中！そしてようやくたどり着いた魔王のお城。門をくぐれば……。ここはどこ！！

もしも勇者が超度の方角音痴だったら？という物語が破綻しかけない設定で送る迷道ファンタジー！

あらすじは必ずしも本編に反映されるわけではありません。

プロローグ：幼馴染と方向音痴（前書き）

若干の下ネタを含みます。ご注意ください。

プロローグ：幼馴染と方向音痴

プロローグ：方向音痴と幼馴染

『アル！アレックス！いいかげん起きなさい！！』

二階からそんな怒鳴り声が聞こえてきて、ナナはあきれ返った。どうやら彼は、まだ寝ていたらしい。

『え、あと五分？今日は大事な用があるんでしょう！あと五分もすれば間に合わなくなるわよ！！』

まだ寝るつもりか、と今度はため息をつく。

おそらくは仕事が休みの日だからと、心行くまで怠惰にすごすつもりだったのだろう。今日の用事もすっかり忘れていたに違いない。そうでなければ、今ごろは支度を済ませて王城へ向かっている最中だ。

（まあ、いざとなればお城まで飛べばいいし、必要な事ってわけでもないけど…）

今後の“旅”にとてつもなく重要なことなのである。一秒たりとも遅刻するわけにはいかない。

ナナはティーカップの底に映る自分を見つめた。

そのために普段より薄めの化粧にしたのに、彼のせいで時間が無駄に過ぎていく。

（旅に出るなんて自分で言ったクセに…一人じゃお城に間に合わないクセに…）

なんで早くから起きとかないかな、と怒ってしまふ。

『早く支度しろって』

また階上から声が聞こえてきて、顔を上げる。

『言っただろうが！』

直後、ものすごい音と共に家全体が振動した。

あの音はアルが爆破でもされたのだろう。パラパラとほこりが降ってくる。

彼は何かしでかすたび母親の怒りを買って、こうして強烈な『お仕置き』を喰らっている。仕事に遅れたり、大事な花びんを割ってしまったたり、ケンカしたり、e t c...その度に竜巻で吹き飛ばされたり、氷付けにされたり、何かしらの容赦ない魔法を喰らっていた。(平和だねー、この国は...)

このどたばたしたやりとりも含め、あくまでも穏やかな一日である。

窓の向こうでは鳥のさえずり。さしこむ日差しはサンサンと。いつもと何一つ変わらない日常がただ流れていく。絶望を抱くほどの脅威などどこにもない。

そう錯覚してしまう。

街の様子を思い返しても、それは同じだ。あくびしながら仕事へ向かう男達、井戸端会議で爆笑するおばさんたち、呼び込みに引かれて出店を眺める旅人...。

分かつてはいるが、実感がわかなかった。

魔王が現れ、世界を破滅させようとしているなどと。

「まったく、あの馬鹿息子は...」

アルの母がほとほと呆れ返った様子で階段を下りてきた。

16になった息子と一悶着したにも関わらず、ほとんど疲労の色が見えない。

その細い体のどこにあんなエネルギーが蓄えられているのだろうか。

「おばさん、お茶ごちそうさま。それでアルは...」

「ごめんねー。いま支度させてるから、もうちょっと待ってて？お茶のおかわり要る？」

「いえ、もういいです」

「そう？残念ねー」

アルの母は残念そうな顔もせず、自分のカップにお茶を注いだ。

「それにしても、あれよね」

「？」

「なっちゃんもよく旅に出ようなんて思ったわね、あんなのと一緒にさ」

「……」

どちらからともなく、天井を見上げた。足音がアツチヘコツチへとせわしなく、バタバタしている。

見つからない物でもあるのか、支度にてまどっているのか。なんにせよまだ時間がかかりそうだとナナは半眼になった。

「あんなの”に育てたのはおばさんじゃないですか」

“あんなの”に育てた覚えはないんだけどねえ……。きつと父親に似たのよ」

冗談混じりに言うナナに対して、アルの母がマジメに眉をひそめた。

「やっぱりそうなんですか」

「絶対そうよ。魔王倒しに行くって言うし、言い出したら聞かないところとかそっくり！」

「アハハ……」

「ホントにさ、いつもはこっちの尻にしかれてばっかりいるクセに、こういう時だけ強情なんだから」

「……。おばさん……」

彼女の瞳はどこか遠くを見つめる様に、窓の外に向けられていた。

「ホント、バカよね……」

「……。とめないんですか？」

「アルを？言ったでしょ、聞きやしないわ。それにあの人は一人で引っちゃったけど、あの子にはなっちゃんがついてるから」

アルの母に信頼の眼差しを向けられ、少なからずドギマギしてしまっ。

「ま、任せてください！あのバカはちゃんと連れて帰りますから！」

「そんなに固くならないでいいのに。でも、ま、期待しておくわ」

アルの母が苦笑混じりに頬をゆるませる。さみしそうな、諦めに似た表情。そつとふさがれた心の穴が見える気がした。

ナナの気持ちは複雑だった。本当ならアルを止めたい。アルの父を探し出したい。彼女を一人取り残したくない。できるなら魔王を倒したい。

旅に出たい。でも彼女のこと、心配で仕方なかった。

「さてと…」

おもむろにアルの母が立ち上がる。

「あの馬鹿、もう仕度できたのかね」

天井を見上げる。バタバタと騒がしかった足音はいつの間になくなっていった。

時計を見ると、予定された時間まで5分もない。ナナも慌てて立ち上がり、アルの母を追って二階へ向かった。

「ホントにもう！女の子は待たせるなって何度も言ってるのに。お城まで吹き飛ばしてやるうかしら」

「冗談ですよね」

「もちろんよ」

メラメラと魔力を立ちのぼらせて言われたら本気としか思えない。彼女なら実際にやりかねないところがまた怖い。

「アル！」

壊れて外れそうなほど勢いよくドアが開かれる。

「……？」

しかし、アルの母はドアを開けたまま部屋に入ろうとしない。ドアの代わりに立ちふさがり、動こうとしなかった。

幼なじみの勘とでもいうのか、ナナの心に嫌な予感がわきあがる。

「おばさん、どいて！」

むりやり脇の下をくぐり抜け顔を上げると、そこには足の踏み場も無いほど散らかった部屋が待っていた。

開きっぱなしのタンスの引き出しには、ヨレヨレのシャツやらベルトが通されたままのパンツやらが垂れ下がっていた。ベッドの角

の方に丸まった布団が放られていて、目覚まし時計は横に落ちてい
る。

窓にはカーテンがかけられ、明かりの無い室内は薄暗い。まるで
慌てて仕度をし、散らかしたまま出てきたかのようだ。

窓際の机の上からっぽの写真立てが、ポツンと置かれている。
アルと、彼の両親が並んで写っている写真が入っていたものだ。

ナナはもう一度、部屋の中をぐるりと見回した。

けれども、そこにいるはずの人物がどこにもいない。隠れている
わけでもなく、本当に姿がなかった。

窓のカーテンを開き、鍵の状態を確認する。彼が出ていったのな
らここしかないはずである。

だが、鍵はしっかりと内側からかけられていた。

「なっちゃん」

いつの間にか我に返っていたアルの母がかたわらに立つ。ナナは
顔を青くして振り返った。

「お、おばさん…」

そして彼女の手にあるモノを見て赤面する。

「とりあえずそれ捨ててください！」

「いやー。あの子もこんなの持つようになったのねー」

妙にヌラヌラテカテカ光るそれを放り投げ、アルの母は苦笑した。

「にしてもまいったわ。いずれはと思ってたけど、まさかこんなに
早くからだなんて…」

「？何がですか？」

アルの母は、空っぽの写真立てを手に取り眺めた。

「あの人の事は知っているでしょう？アルの、お父さん」

頷く。といっても、会うこと自体まれだったから、幼なじみの父
親なれどあまり多くを知らないのだが。

「あの人はね、超度の方向音痴なのよ。こんなのはしょっちゅうだ
ったわ」

数秒の沈黙。その間に、ナナの頭に浮かんできたのは「？」「マー

クと、道に迷って泣きじゃくっている小さい頃のアルだった。

ナナが理解していないことを察してか、アルの母が説明を加える。
「なっちゃんが使えろ『テレポート』とかの魔法でもない。ただの、『人知を超えた程度の方向音痴』。いつのまにやらそこから居なくなっていて、本人は世界のどこかへ行ってしまってる…アルのお父さんもね、そういう能力を持っていたの」

さらに、アルはそこまでひどくなかったのだが、もともと方向音痴だったためにいつかそうなってしまうのではないか、と危惧していたらしい。それが今、現実になったことで、やはりアルも父親と同じ能力を持っているのだということらしい。

「ホント、この能力には困らされたわ」

アルの母は事軽く言ってくれるが、ナナの方は、それどころじゃなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4864s/>

ココドコ！～まいごのまいごの勇者様～

2011年4月15日18時25分発行